

質問

山丹・山丹交易について 山丹交易の担い手は、どこに住むどんな民族なのでしょう。また、交易の実態を具体的に教えてください。

[回答者] 谷本 晃久

「山丹」という語は、「さんたん」とよむ。江戸時代の和文史料に見える用語で、北海道の北、サハリン島（旧樺太）から間宮海峡（韃靼海峡）を越えたアムール川（黒竜江）下流域を指す。片仮名で「サントタン」と表記されたり、漢字で「山韃」や「山旦」と書かれたりもする。そこに住まう民族集団を指す場合、用例としては「山丹人」と書かれ、地域を指す場合には「山丹地」などと書かれる。漢文の文献には「山丹」という語は見えず、和文に限定された用語である。北海道・サハリン南部に住むアイヌや、サハリン中部に住むウイグルの言語に見える、「サンダ」「シャント」といった単語に由来する借用語とされる。「山丹」については、日本史のみならず東洋史・文化人類学の分野における研究が近年飛躍的に進み、その実態が明らかになりつつある。ここでは以下、佐々木史郎・松浦茂・児島恭子・中村和之らの仕事を踏まえ、解説を試みてみたい。

「山丹人」は、ウリチと呼ばれる民族集団を指す。もちろん前近代における民族集団の定義は画然としたものではなかったから、アイヌ出自の者やサハリン北部・アムール川河口域に住むニヴフ出自の者などをも含み込んだ集団と捉えるべきだが、その中核をなしたのは現在のウリチの人びとの直接の先祖であるのとみてよい。ウリチは現在、ロシアにおいて公認された民族のひとつで、アムール川下流域（現ロシア連邦極東連邦管区ハバロフスク地方）に約三三〇〇人が暮らしているとされる。「山丹地」とは、従って、狭い意味では近世におけるウリチの居住地を指すが、幕末の用例をみると、ウリチ居住の有無にかかわらずアムール川下流域一帯を広く指して用いられている。ウリチの居住域を含むアムール川下流域（アムールランド）は、一九世紀中葉に露清間で結ばれたアイグン条約（一八五八年）・北京条約（一八六〇年）でロシア領となる以前、ネルチンスク条約（一六八九年）が長く効力を持ち清朝の支配が及んでいた。清朝はこの地域の諸民族を、収貢領賞のシステムで政治的に編成した（辺民制度）。清朝は、アムール川支流松花江流域の都市三姓（現依蘭）に吉林將軍管下の副都統を置き、アムールランドにおける辺民編成の要とした。三姓副都統はアムール川下流域右岸のデレンに設置された出先機関（満洲仮府）に役人を派遣し、収貢領賞の実務を管掌せしめたが、その対象



山丹交易関連概念図

はウリチ・ニヴフ（大陸ニヴフ）・ナナイといったアムールランドの諸民族にとどまらず、サハリン島のニヴフやアイヌにも及んだ。一八〇九年（文化六）にサハリンを経てデレンを訪れた間宮林蔵は、デレンにハラタ（「長夷」・カーシント（「次夷」）の官職を授かっているニヴフやアイヌがサハリンから入貢している様子を記している（『北夷分界余話』）。

清朝が貢納物として求めたのは、毛皮である。とりわけ、貂^{かわうさぎ}や獺^{きつね}が求められた。これへの対価として、官職とともに頒

賞品が下された。授けた官職に応じた絹織物の官服（チャイナドレス状の龍紋衣）や反物、青玉^{せいぎょく}などがそれである。ウリチは入手した絹織物や青玉を、鷺羽らとともにサハリンやソウヤ（宗谷）にもたらしアイヌや和人と交易した。アイヌからは毛皮を調達し、和人からは和製品（鉄鍋や小刀）を入手したのである。アイヌはウリチから得た山丹交易品を、和人へ転売するのが一般的であった。このうち絹織物は「蝦夷錦」や「山丹錦」などと呼ばれ、松前藩主が贈答品に用いたほか、一般に流布し袷袢や文具に仕立てられるなど、日本社会で珍重された。

このようなウリチや樺太アイヌを通じて中国製品や鷺羽が日本へもたらされ、毛皮や和製品がアムールランドへもたらされる交易ルートは、かつて朝鮮史家の末松保和によって「山丹交易」と定義され（『近世に於ける北方問題の進展』一九二八年）、現在でも分析概念として用いられている。よって、山丹交易に従事したのはウリチ・山丹人に限定されず、デレンに直接入貢し官職とともに頒賞品を得たり、山丹人と日本との間の中継交易に携わったりしたアイヌやニヴフが含まれることになる。近世の日本は清朝へ入貢していなかったから、長崎に龍紋衣の官服がもたらされることはない（琉球王へは冊封時に龍紋の施された反物が清朝皇帝から下賜されている）。蝦夷錦が珍重されたのは、こうした事情も手伝ったことであつた。

山丹交易が本格化したのは、清朝によりアムールランド諸民族に対する三姓副都統を介した辺民編成が確立し、毛皮集荷圧力が高まった一八世紀前半以降とされる。和文文献における「サンタン」の初見は、金座役人坂倉源次郎の筆になる一七三九年（元文四）成立の『北海随筆』とされ、年代的に符合する。むろん、サハリンを介したアムールランドと蝦夷地との間の文物の往来は、それ以前にも確認される。たとえば明清交代以前の六一八年（元和四）に松前を訪れたイエズス会士がローマの本部へ送った報告書には、中国製の絹織物が蝦夷島日本海側のアイヌにより松前へもたらされるルートが記される（『北方探検記』）。しかしながら、一般的に山丹交易という場合、それは一八世紀前半から一九世紀後半にかけ、清朝と幕藩制国家による需要を前提とした交易と限定して理解するべきであろう。

このようにサハリンのアイヌは直接交易者あるいは中継交易者として山丹交易に従事していたわけだが、一八世紀末頃になると、対山丹人取引での負債が恒常化し、負債のかたに人身を拘束・連行される者が続出するに至った。こうした状況は一七九二年（寛政四）にサハリンを踏査した最上徳内の報告により明らかとなり（『蝦夷草紙後編』）、幕府はサハリン支配やアイヌ撫育の観点から、何らかの対応を迫られるに至る。幕府はロシアの南下に対応して一七九九年（寛政一一）に箱館・東蝦夷

地を上知、ついで一八〇七年（文化四）にサハリン南部を含む松前蝦夷地一円を上知し、松前藩は奥州梁川へ転封とした。その翌年の〇八年から〇九年にかけ、幕府は松田伝十郎・間宮林蔵らをサハリンへ派遣し、その実情を踏査させた。林蔵がデレンの満洲仮府へ至ったのはこのときであり、併せてサハリンが島であることを確認したのもこのときである。

伝十郎は踏査後も連年サハリンへ出張し、一七九〇年（寛政二）以来松前藩により山丹交易の拠点がソウヤから移されていたサハリン西南端のシラヌシにおいて山丹人を応接し、アイヌの抱えていた負債を一八一二年（文化九）までに公金により精算し、以後幕府が直接山丹交易にあたる旨を伝達した。いわば山丹交易の公営化である。これにより、以後原則としてサハリンのアイヌが中継交易者として山丹交易に関与することはなくなった。幕府はウリチ語に通じたサハリン駐在の和商人を「山丹通詞」として取り立て、交易実務にあたらせている。交易の規模は、一八五三年（嘉永六）の記録によると、四艘の船で六六人の山丹人が来航し、青玉二四二〇連、真羽（鷲羽）三六把余、袖物（龍紋衣）七枚、牡丹形錦（反物）五一本、龍形錦（反物）三三本、煙管一〇本などがもたらされ、獺皮一二五六枚、狐皮五九二枚、貂皮五八〇枚、鉄鍋二七枚、鑢やうな五七挺、手斧六挺が出荷されている（『北蝦夷地御引渡目録』）。

そこで問題となったのは、毛皮の調達である。サハリンにおけるアイヌの対山丹人負債恒常化は、前貸精算制によりアイヌへ渡された蝦夷錦・鷲羽などの対価として求められた毛皮が調達できなかったことに起因する。その背景には、日本による山丹交易品の需要の増加（＝調達の強制）とともに、サハリンにおける毛皮資源、とりわけデレンの欲した貂・獺・狐の枯渇があったものと捉えられる。幕府はシラヌシにおける山丹交易を一定規模で維持するために、山丹人の欲する和製品（おもに鉄製品）に加え、貂・獺・狐の毛皮を安定的に調達する必要性に迫られたのである。これらの毛皮は「小皮類」と呼ばれ、松前藩復領期・幕末の幕府再上期を通じて、奉行所または藩の責任により集荷される体制が構築された。出利葉浩司や長澤政之の研究によると、「小皮類」の集荷割当は蝦夷地全域（サハリン・北海道・南千島）の場所請負人に加え、松前地の和人諸村落や、北蝦夷地＝サハリンの場所請負人と取引のある加賀・越中・能登の間屋商人へも及んでいる。こうしてみると山丹交易は、蝦夷地の狩猟者（アイヌ）のみならず、松前地や北陸地方の狩猟者（百姓）の生業にも影響を及ぼしていたといえそうだ。

山丹交易の終焉は、一八六八年（慶応四）に箱館奉行所が交易停止を決定したことによる。その前年には、結果的に最後となる交易が山丹人を迎えシラヌシで行われた。これに先立つ一

八五四年（安政元）に幕府は日魯通好（日露和親）条約を締結し、日露間の国境を定めているが、サハリンについては国境未確定とされ、この体制下にも山丹交易は継続された。しかし、ロシアによるアムールランド領有後の一八六七年（慶応三）に日露間で「カラフト島仮規則」が結ばれ、サハリンは両国雑居と定められる。同規則では先住民の自由交易が保障されたため、アイヌを排除した従来の山丹交易のかたちが問題となったのである（東富内御用所「慶応四戊辰年正月 御用留」）。この体制下では、ウリチ・アイヌ間の交易は妨げられなかったが、その後サハリン方面の国境は、一八七五年（明治八）に明治政府がロシアと結んだ樺太千島交換条約で確定し、サハリン全島はロシア領となり、宗谷海峡が明確に国境と定められるに至る。こうした二国間における近代の国境画定作業のなかで、山丹交易の成立する余地は失われたといつてよい。

以上のように、清朝の辺民編成と幕府の対蝦夷地政策という近世的な秩序のなかでこそ機能したのが、山丹交易の特質であった。その主要プレイヤーに山丹人＝ウリチがおり、近世を通じてソウヤあるいはシラヌシに定期的に来航し、日清間の中継交易者としての役割を果たし続けていたことも、日本近世の対外関係の一側面として位置づける必要があるだろう。

（たにもと・あきひさ／北海道大学文学研究科准教授）